

# 社会主義から資本主義への狭間にて

## ～ モンゴルと中国東北部 ～

決算委員会調査室 きりやま まさとし  
桐山 正敏

### 1. はじめに

この8月、参議院ODA調査派遣第一班同行者として、モンゴル共和国ウランバートル市を初めて、中国東北部の瀋陽市を9年振りに訪問した。中国には93年4月以来、公私併せほぼ2年に一回訪れているが、この間の都市部の変化には驚かされる。ウランバートル市も想像以上の外形上の発展を遂げていた。この滔々たる資本主義化の流れは止めようがないと思われるのだが、25年前に社会主義国ポーランドで3年間を過ごした身には、色々と考えさせられる所も多い。

今回は、いささか印象論的な叙述に留まるが、モンゴルと中国東北部の社会主義から資本主義への転換の現状について紹介したい。

### 2. モンゴル共和国

(1) 我が国の4倍の面積に50分の1の人口と言うと、一面に草原が広がり、伝統的なゲルが散在するという景色を思い浮かべるが、中部は意外に起伏がある丘陵地帯で南部にはゴビの荒野が広がる。国の真ん中よりやや北に位置するウランバートルは周囲を低い丘に囲まれた盆地にあるが、地方から都市部への人口流入(2003年5月から一家族あたり700平方mの土地私有が認められたことが加速させた)が著しく、公称人口90万人に対して実際は110-120万人が住むと見られている。モンゴル人は遊牧生活が好きで、都市に住んでいても夏は田舎のゲルに行き、老後は地方で暮らしたいと考えていると言われるが、都市生活を覚えた若者たちが遊牧生活に戻るとは私には考えられない。一つの大都会以外は過疎地という状態にならないか、懸念する。

既存市街地を取り囲んで柵で囲った木造及びゲル家屋が乱立し、丘陵の頂上に至る姿は異様である。これらの地域には、上下水道は全くなく、廃品回収、解体業など低賃金労働を余儀なくされた人々により、スラム化した状態になっている。

(2) 1990年3月に複数政党制が認められ、92年2月には新憲法が制定され、社会主義体制に決別したが、急激な社会主義離れ、資本主義化は、社会・経済の混乱も生み、急激なインフレ、生活水準の低下をももたらした。近年、その混乱も収まり、旧体制党である人民革命党の奪権、さらには民主勢力との連合政権と政権交代のルール化も進んできている。

本来の産業は、牧畜業であるが、遊牧という広大なスペースを必要とする方式を採用しているため、2-3割増の3,000万頭が限度と拡大の余地が乏しいと言われる。現に牛肉は中国からの輸入に依存している。工業化の準備がないまま先端資本主義に直

面しているという状況である。

現在、注目されているのが鉱物資源である。南部ゴビ砂漠の「タバントルゴイ」石炭鉱区は埋蔵量5億トンとオーストラリア原料炭の10年分あり、「オコートルゴイ」鉱区の銅、金鉱山は大鉱山の可能性を秘めていると各国が利権獲得を競争している。鉱業権を民間にも認める法改正が昨年なされた。短期的にはモンゴルを潤すであろうが、採掘技術は先進国に、労働者は中国に頼らなければならない点が、中長期的には気にかかる点である。

(3) 生活基盤整備がまだまだ遅れている。むしろ社会主義体制下で、曲がりなりにも計画的に進められていたものが、経済採算性だけで判断するようになり、地方ではむしろ低下しているようだ。ソ連が作り、日本の援助で修理、運営している第4火力発電所は、現在ウランバートル市の電力需要の70%を供給しているが、今後急増するであろう電力消費に対する対応は、未だ取られていない。道路は80%が20年以上経過しているとのこと、ソ連の型枠にコンクリートを流し込む工法で作られており、穴ぼこだらけの「ソロバン道路」状態で、我が国の援助による「太陽道路」のアスファルト舗装の走り心地は正に天国であった。まわりに社会主義型アパートが建ち並び、穴ぼこだらけの市内の歩道を歩いていて、ふと1980年のワルシャワを思い出した。

(4) 社会主義時代の教育成果で識字率は高い。また難しいモンゴル語の発音から比べると日本語を習得することはそれほど困難ではないという。だが人口の絶対的な少なさ(250万人)が将来の発展にはネックになるのではなからうか。興味深かったのは、歴史教育である。社会主義政権下では、ロシアを侵略し「タタールの頸木」に追いやりその発展を数百年遅らせ、中国を犯した親玉ということで、チンギスハンの名は公式教育で無視されていた。当時のモンゴル史は社会主義革命から始まり、それ以前の歴史は学校で教えられなかった。それがまったく逆転し、今年はチンギスハン建国800年を国を挙げて祝っている。視察した小学校の廊下には、彼から最後の活仏まで歴代ハンの肖像画が飾られていたのが、非常に印象的であった。歴史は「作られる」ものであり「消される」ものなのだ。モンゴル語は、ロシア語と同じキリル文字で表されているが、これを本来のモンゴル文字に改めると決められたものの66年間の社会主義体制でモンゴル文字が読み書き出来る人はいず、市内でもモンゴル文字を見ることは殆どなく、この復古は失敗したようである。

(5) 現在まで、援助国として日本は圧倒的な存在であった。しかし食料、生活必需品はほとんどが中国製品で経済圏としては中国に頼らざるを得ない。また従来インフラはほとんどソ連製という歴史的経緯や、さらに最近著しい韓国の進出等を考えると、大相撲を通じての対日好感情などを考えても、これからの対モンゴル支援は、より戦略的にきめ細かく一般的経済関係の深化と合意したものでしていくことが必要であり、過去に依存した過大な期待を相互に持たないことが必要ではなからうか。

### 3. 中国東北部(遼寧省)

(1) 遼寧省は、人口4,000万、東北三省の中心となっている。この百年来、中国東

北部は重工業地帯、穀倉地帯として重要な役割を占めてきた。現在、遼寧省の全国シェアは農業全体では9.5%であるが、豆類41%、とうもろこし29.4%と穀物では大きなシェアを誇っている。鉱工業では原油36.8%、鉄鋼11.9%などが目立つ。

現在は、全国第8位のGDPであるが、遡ると52年1位、78年2位、90年4位、04年には8位と次第に順位を下げている（東北三省合わせても江蘇省の次）。工業発展では、後発の長江デルタ（上海）、珠江デルタ（広東）、山東（天津）に差を付けられての焦燥感がある。（経済成長率は12.3%と全国平均並）

重工業中心であり、国有企業依存度が極めて高い。全国平均が38%であるのに対し、遼寧省は61.3%、他の吉林、黒竜江省ではこれ以上の比率であり、企業再編、民営化が長年の大きな課題となっている。人材面では、日本との関係が深いこともあり、日本語能力に優れ、三省で一級試験受験者の26.2%を占めているという。

2003年より国家プロジェクトとして「東北振興政策」が実施され、「外国投資の促進、新規産業育成、交通インフラ整備（道路、鉄道）」が計画されている。

（2）瀋陽市は、人口700万、2004年に「国家環境保護都市」、05年には「国家森林都市」の指定を受け、9年前には市内中心部にも古い工場群が立ち並んでいたが、今回見たところでは、そのような工場は一掃されていた。かつての黄色い煙も白煙に変わり、北京より綺麗な空が実現されていた。環境対策として「熱電廠（地域暖房施設）」を見る予定であったが、フライト遅れから訪問できなかったことは残念であった。

都市化が大変なテンポで進んでおり、9年前の農地は郊外市街地になり、更に日に日に広がっている。都市近郊では、花卉栽培が行われ、日本へも流行最先端のものが盛んに輸出され、今年は国際花博覧会が開催されている。また野菜栽培も盛んで日本の野菜市場は今や中国野菜なくして安値安定供給は成り立たない状況である。

（3）日本の援助への期待は、大変に強く、新規供与は北京五輪までとされたはずの円借款の新規供与をなお期待するとの公式発言があった。中国国内では、地方分権化が進み地域間競争が激化し、中央政府のグリップが随分と弱まっている。中央政府内でも各部（省）の独立性はますます高くなっており、北京市の中心、長安街は建築競争でほとんどの官庁が一新された。中でも眼を引くのが天安門近くの公安部である。

（4）隣接する撫順市は、20世紀始めより、石炭の露天掘りで有名である。対岸が距離と煤煙のために霞んで見えない規模に圧倒される。市内では昭和40年代の筑豊、北九州地帯を思い出させる街並みが続く。瀋陽郊外の朝鮮族居住地域の高校で日本語を指導している青年海外協力隊の女性によれば、生活上の痛痒はほとんどないとのことであったが、撫順で働いている同期生は生活に苦しんでいるとの由、隣接市でも地域間格差は大きい。北京、瀋陽というような大都会でも数十キロ離れば、未だに電気が通わぬという集落もある。貧富の格差は凄まじく、絶対的貧困人口（1日1ドル以下の生活水準）は2億人以上と言われる現状がある。

（5）社会主義経済のネックは農業である。中国では三農（農業、農村、農民）問題と言っている。中国の租税制度は、地方から税を吸い上げる上納システムで、9年前には、上海で「我々は過大な租税を負担させられている」との愚痴を聞いたものであ

るが、近年は、地方の特に末端組織で上納金以上の過重な負担金を農民に課し、それを自分達の懐に入れるという収賄構造が大きな問題となっている。一方、所得税の捕捉は充分でなく、表向きの所得と実収入の乖離が生じ、都市、農村を問わず、利権にありついた（つける）人間が旨い汁を吸うという特権構造が定着してしまっている。

中国の過去の歴史を振り返ってみれば、王朝末期は、農民一揆＋宗教集団で崩壊するというのが、決まったコースである。法輪功に対する当局の恐れと弾圧は故なしとしない。

（６）医療に関しては、９年前に北京の日中友好病院を、今回は中国医科大学（瀋陽医科大学が母体）を見た。医療機器は新しくなっているが、病室は相変わらずの印象で、かつて驚かされた食事の自己調達制は変わっていないとの由、従来は軍、国有企業など一つの生活「単位」（農民にはそもそもこのような単位が成立していなかった）として売店、病院などを持っていた。このような組織ぐるみの社会保障制度が、急激に崩壊し、国有企業を放り出された人々には大きな負担となっている。瀋陽市では医者看板が異様に目立った。ここでも都市部への医師集中は凄まじいようだ。

草の根支援として貧困層の白内障対策に取り組まれている佐々木金沢医科大名誉教授の話では、病院の中国人医師達は直ぐに手術をしたがるが、農村部では眼鏡さえ知られておらず、まず眼鏡をかけさせることが先決で、基礎情報の提供、指導者層の育成が不可欠とのことである。都市部の凄まじい競争社会を垣間見させてくれたのは、無償プロジェクトで日本に留学した医科大学教授のプレゼンテーションを聞いた時である。表彰数、論文数、手術数が次々と披露された。現代中国には日本の明治と平成とが併存しているのである。

（７）改革開放政策になってからの中国の発展にはめざましいものがあるが、今や経済は過熱、生産能力過剰に至っている。一方で、汚職、特に地方官吏の腐敗ぶりは凄まじく、その他、黄河の濁水と長江の洪水という水問題、見せかけ主義の横行等、多くの問題も抱える。

政経分離で、経済の自由化は進めるが、政治に関しての自由化は進めないという中国、表現の自由のないIT社会化が進められているが、情報統制がどこまで効くか。規制が強いほど崩壊後のギャップは大きい。あのルーマニア・チャウセスク独裁体制を崩したのは衛星放送であった。矛盾ではち切れそうな一党独裁の革袋は何時まで持つのであろうか。

\* 統計数字は派遣調査時に入手した外務省資料による。

#### 【参考文献】

モンゴル科学アカデミー歴史研究所『モンゴル史』（恒文社 昭和63.10）

宮脇淳子『モンゴルの歴史』（刀水書房 平成14.9）

陳桂棣・春桃『中国農民調査』（文藝春秋 平成17.11）

杉本信行『大地の咆吼』（PHP研究所 平成18.5）